

世界とつながるために

立命館守山高等学校 3年 中井 咲希

グローバルな人材とは何だろうか。私はコロナ禍で世界が急激に変化していく中で、疑問に感じ始めていた。

私は、コロナ禍の前にカナダに留学していた。長い間日本を離れるのは時に苦痛だったが、現地のホストファミリーや友達と楽しい日々を送っていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によって、日本に帰国せざるを得なくなった。

コロナ禍の中帰国した私を待っていたのは、海外の友達はもちろん、日本の友だちともスマホの画面の中でしか会えない世界だった。オンラインというコンテンツが発達し、家の中でゲームで知り合った海外の友だちと交流するなど、積極的に国際交流を行っていた。

学校が対面で再開し、私は友だちに誘われて、オンライン上でシンガポールやフィリピンの高校生と一緒に旅行ビジネスを考えるコンテストに参加した。得意教科であり、ずっと勉強してきた英語を活かせると思ったからだ。しかし現実はその甘くはなかった。いくらオンラインが発達したとはいえ、それぞれの学校のスケジュールもバラバラ、時差もあり、言葉も違う状況で、12人で話し合っただけでアイデアをまとめるのは非常に困難だった。また、全く異なるバックグラウンドや価値観を持つチームメンバーに自分の考えを上手く伝えることができず、自分の不甲斐なさを感じた。

この出来事以降、世界で活躍できる人材とは何なのか疑問に感じるようになった。人より英語を話して、留学に行って海外の人と交流することが本当に世界で活躍できる「グローバルな」人材なのか考え直すきっかけになった。

国際社会で活躍できる人材とは何だろうか。私が所属する高校のグローバルコースの説明にはこのような記述がある。「コミュニケーション能力や英語運用能力を磨き国際社会で活躍できる人材を育てます。」とある。しかし私はこれだけでは不十分だと考える。先に書いたように、私は留学を通して英語力やコミュニケーション能力を培ったが、それだけでは不十分だった。私は、国際社会で活躍できる人材には、物事を俯瞰して、多角的にみる能力が必要だと考える。

具体的には「物事を俯瞰して多角的にみる」ために、様々なコンテンツに触れ、「自分だったら」と置き換えて考えることが必要だと考える。英語を話せるというスキルや、コミュニケーション能力は「物事を俯瞰して多角的にみる」ための一つの手段にすぎず、その二つを磨きただけでは、国際社会で活躍できる人材とは言えないのではないだろうか。

オンラインでの交流会が普及し、家でも国際交流ができるようになったが、オンラインでの手軽さと引き換えに私たちは大切なものを失っている気がする。現地に実際に飛び、現地の様子や社会課題を実際にこの目で見て、様々な人の意見を聞くことがやはり不可欠だ。実際に私も、留学先で現地の人と空間を共有することで、本やオンラインではわからなかった体験をすることができた。オンラインという小さな画面で少しの情報を獲得するより、実際に世界に飛び込んで、三次元の世界に浸かるべきではないだろうか。

よく「世界は狭くなった」と言われる。もちろん地球の半径は六四〇〇kmで変わらないが、様々な技術の発達や、文化の画一化によって、狭く感じるのだろう。そんな狭くなった世界に七〇億人の人がいて、彼ら一人一人に、それぞれの考え方や個性がある。そんな彼らと話すときに、相手の目線になって、自分の価値観から生まれる固定観念を捨てて物事を考えることが、これから世界で生きていく上では必要であり、留学や英語の勉強はその練習であると考えている。